



長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大 学客員教授。

「このお手紙がお手元に届く時、僕はこの世におりませんが、長きに亘ってのお付き合いにお礼を言いたくて家人に託しました(中略) まことに人生は出会いでありま

81 ジャズピアニスト 佐山雅弘

「自分は自分が出会った人で出来ている」感謝の遺言



さんが残したメッセージです。享年64。死因は胃がんでした。享年

「自分は自分で出会った人で出来ている」。医者には言えない名言です。私の地元、兵庫県尼崎市出身と

いつこともあり、誇りしきさを感じました。佐山さんが身体に異変を感じたのは2014年8月。急激に食事が減り近くのクリニックを受診すると、逆流性食道炎との診断。しかし10キロも痩せたことに疑問を覚え、別の医療機関で胃カメラ、CT、PETと検査を重ねましたが病態が明らかにならない。結局、開腹しないと

わからなとの説明で、11月4日に開腹手術。結果はスキルス胃がん。胃の3分の2を摘出しました。どうしてそこまで見つからないの？と思う人もいるかもしれませんが、これがスキルス胃がんの怖さです。胃壁の内側を這うようにしてがんが広がるため、早期発見が難しく、健診では見落とされる場合があまりです。しかし佐山さんの場合は、食欲不振などの自覚症状があったため、比較的早期のステージ2の段階で発見されたのでしょう。

食べることが大好きだったように、音楽と同じくらい食と酒についてもプログに綴っていました。がんになった後も、ときどきお酒も飲まれていたようで、美味しいものと友達、そして音楽があれば人生は幸せだ、というメッセージは心に響きま

奏でています。2015年5月、腸閉塞(へいそく)のため再手術。抗がん剤治療も続けていたようですが、あくまでも音楽活動やQOL(生活の質)を優先したがん闘病。プログを読む限り濃厚な医療は受けていなかったようです。しかし迫りくる「死」を明確に意識していたことは、先の手紙を準備していたことから想像できます。

亡くなる3カ月前に行われたソロライブ映像を視聴しながら、この原稿を書いています。美しく跳ねるような音色は少しも死を予感させません。弾いている佐山さんは終始笑顔です。「自由への賛歌」という曲が佐山さんのお気に入りでした。彼の魂は今この瞬間も、自由にピアノを奏でています。